

## 中学校英語の検定教科書にみられる Yes/No 疑問文への応答の仕方の分析

犬塚 章夫

外国語教育講座

### Analysis of Answer Patterns to Yes/No Questions in Junior High School English Textbooks

Akio INUZUKA

*Department of Foreign Languages, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

#### 要 約

本研究では、令和3年度より使われている中学校英語検定教科書6社18冊におけるYes/No疑問文への応答の様子を分析した。分類には、Richards(1977)の6分類を用いている。6分類とは、分類1(Yes/Noだけの応答)、分類2(Yes/Noに続けて問いとなる疑問文の動詞か助動詞の繰り返しを含む文による応答)、分類3(YesかNoに続けて、新たな追加情報が付与された応答)、分類4(YesかNoはなく、問いとなる疑問文の動詞か助動詞が繰り返される応答)、分類5(YesやNo、あるいはその中間の意味の類義語での応答)、分類6(文脈によって間接的に肯定か否定かを示す応答)である。本研究では、先行研究である川尻(1978)、深沢(1992)、村端・猪股(1995)の結果と経年比較をすることで、Yes/No疑問文への応答の種類の割合がどう変化しているか、現行の教科書の特徴は何かを明らかにした。教科書が学習指導要領の内容の推移にあわせ、コミュニケーション重視となり、実際の言語使用場面を想定した内容に変化していることにつれて、Yes/No疑問文への応答の種類の割合が、Richards(1977)で示された話し言葉のそれに近づいてきていることが分かった。また、中学校という英語学習入門期で文法を学習し始める段階であることから、教科書本文に、より基本形に近い表現を使用する必要があるとともに、もう一方でよりバリエーション豊かに文脈を考慮した表現も学習者に提示する必要があるという特徴が見られた。令和2年度から小学校高学年で外国語が教科化され検定教科書が使われるようになった。小学校段階では音声による学習を主とするので、音声で提示される歌の中にバリエーション豊かな表現も扱われている。学習者が教科書に示されている表現をどう習得していくのかを明らかにするのが今後の課題である。

Keywords : Yes/No 疑問文 応答の仕方 検定教科書

#### I はじめに

令和2年度より実施されている学習指導要領において、小学校に教科としての「外国語」が置かれた。その指導内容「話すこと(やり取り)」において即興的に話をする力を育てることが求められるようになっていく。しかし小学生のやり取りの様子を観察してみると、授業で繰り返し練習をした表現がそのまま会話の中で使われているわけではないことが分かった。具体的にはYes/No疑問文に対する応答が、Yes, I do.やYes, I can.など学習した表現どおりに言えていない。先行研究を調べてみると、Yes/No疑問文への応答パ

ターンは6つに分類でき、教科書本文に出てくる応答パターンの使用比率と実際に会話で使われている応答パターンの使用比率は異なっていることが分かった。

本研究の目的は、教科書も時代の要請で少しずつその内容を変化させてきているので、先行研究に示されている当時の中学校英語の検定教科書におけるYes/No疑問文への応答パターンの使用比率と、現行の中学校英語の検定教科書におけるそれとに変化がみられるのかを明らかにすることである。本稿ではRichards(1977)の先行研究と、当時の日本における中学校英語の検定教科書を調査した川尻(1978)、深沢(1992)、村端・猪股(1995)の成果をまとめ、村端・猪

股(1995)の分析手法を用いて、現行の中学校英語の検定教科書を調査分析した上で、先行研究の結果と比較し、類似点や相違点を考察していく。

## II 研究背景

### 1 Richards の調査

Richards (1977)では、Yes/No 疑問文に対する応答の仕方を表1のように6つのタイプに分類している。そして小説や戯曲に現れる「書き言葉」<sup>1</sup>、学生へのインタビューをデータとした「話し言葉」<sup>2</sup>、そして6冊の教材の中にどのくらいの頻度で現れているかを分析している。

Richards の分析結果は図1の様であった。教材では、分類2が最も多いが、自然な発話である「書き言

葉」や「話し言葉」では、分類3,5,6が多く、分類2は、かなり少ないことが分かる。つまり、教材においてYes, I do.やYes, I can.など分類2の応答を大量に学んでいるのに、実際にはそれほど使われていないことになる。

### 2 川尻の調査

川尻(1978)では、Richards の6つの分類を用いて、昭和53年度版の日本の中学校の教科書(3社9冊)<sup>3</sup>を分析し、図2の様な結果を得ている。当時の教科書では、特に入門期の1年生の教科書において、分類2が圧倒的に多いことが特徴としてあげられる。新たな文法事項を学ぶごとに、Yes/No 疑問文で繰り返し、Yes, I am./ Yes, I can./ Yes, I have.など応答の仕方を学ん

表1 Richardsの6つの分類

分類名	説明	Richards(1977)に挙げられた具体例 (一部)
分類1	YesかNoだけの応答	Don't you like to sit on the floor? No.
分類2	YesかNoに続けて問いとなる疑問文の動詞か助動詞の繰り返しを含む文による応答	Didn't we have a class or something together? Yes, we did. Is there to be mass in the morning, father? Yes, there is to be mass.
分類3	YesかNoに続けて、問いとなる疑問文の動詞か助動詞の繰り返しではなく、新たな追加情報が付与された応答	Aren't you going to have any? No, I never eat asparagus.
分類4	YesかNoはなく、問いとなる疑問文の動詞か助動詞が繰り返される応答	You are not going? I am.
分類5	YesやNo、あるいはその中間の意味の類義語での応答	Are you feeling all right? Of course, durling.
分類6	文脈によって間接的に肯定か否定かを示す応答	Has something happened, mother? I'll be all right in a minute.

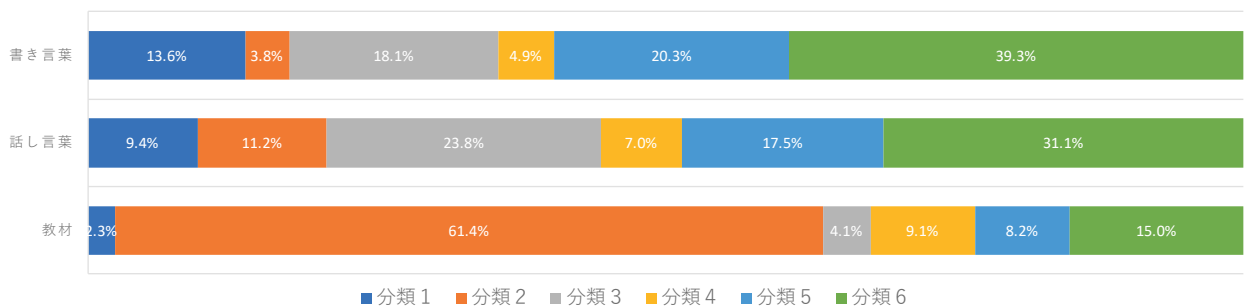


図1 Richardsの調査結果

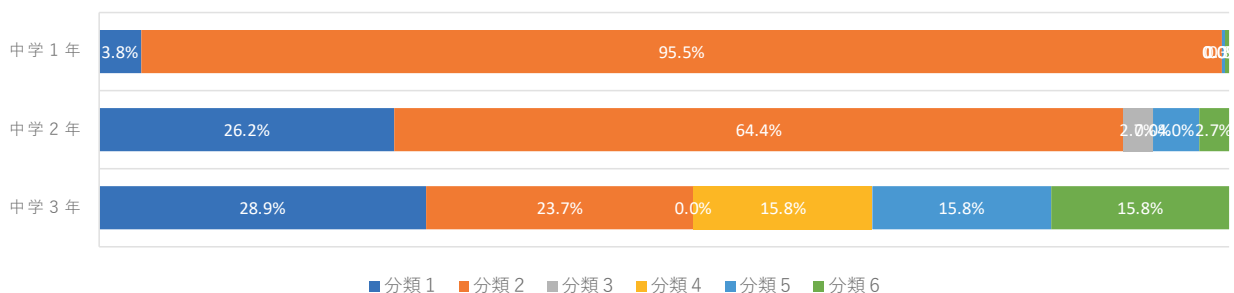


図2 中学校の教科書の分析結果 (川尻,1978)

でいるからであろう。中学2年生においても分類2が最も多くを占めている。

### 3 その後の日本の中学校英語教科書の調査

深沢(1992)では、Richardsの6つの分類をもとに平成2年度発行の検定教科書(6社18冊)<sup>4</sup>を分析し、村端・猪股(1995)では、平成5年度版の検定教科書(7社21冊)<sup>5</sup>を分析している。川尻(1978)から新旧の教科書における各分類の使用比率を比較してみると、図3の様になる。時間の経過に伴い、分類2の割合が激減しているのが分かる。それとともに他の割合が増え、教科書の中にバリエーション豊かな応答の仕方が紹介されてきていることが分かる。

### 4 リサーチクエスション

以上の様に先行研究結果を比較してみると、教科書の本文に登場するYes/No疑問文への応答の仕方は、Richardsが調査した「話し言葉」の使用実態の割合に近づきつつある、つまり使用実態に合わせて教科書本文に応答の仕方のバリエーションが豊かに表現されていると考えられる。本研究では、次の2つのリサーチクエスションを設定して、村端・猪股(1995)のデータ分析の手法を用い、令和3年度から使用している現行の中学校英語検定教科書(6社18冊)<sup>6</sup>を分析してみることにした。

Q1: 1995年以前に発行された教科書と現行の教科書を比較して、Richardsの6つの分類の割合に変化は見

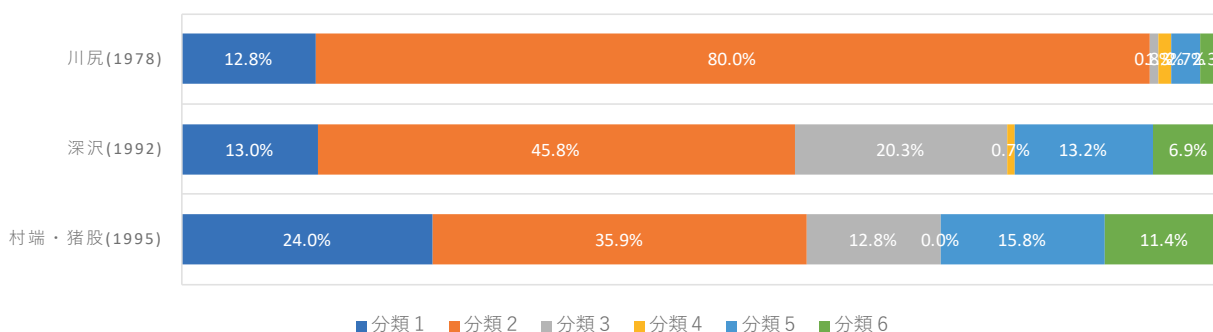


図3 新旧教科書の分析結果比較

表2 現行の中学校教科書の分析結果一覧

番号	教科書名	学年	記号	分類1	分類2	分類3	分類4	分類5	分類6	合計
1	New Horizon	1	A1	9	20	4	1	4	2	40
2	New Horizon	2	A2	4	2	1	0	6	0	13
3	New Horizon	3	A3	5	3	1	1	2	2	14
4	Sunshine	1	B1	6	15	1	0	3	2	27
5	Sunshine	2	B2	15	2	2	0	10	3	32
6	Sunshine	3	B3	11	2	3	0	1	3	20
7	New Crown	1	C1	3	8	0	0	1	1	13
8	New Crown	2	C2	6	3	0	0	1	4	14
9	New Crown	3	C3	3	0	0	0	2	4	9
10	One World	1	D1	12	7	4	0	2	3	28
11	One World	2	D2	5	1	3	2	6	6	23
12	One World	3	D3	3	2	1	0	2	3	11
13	Here We Go	1	E1	6	8	2	0	2	2	20
14	Here We Go	2	E2	3	3	2	0	6	13	27
15	Here We Go	3	E3	0	3	0	1	3	5	12
16	Blue Sky	1	F1	3	15	0	0	6	2	26
17	Blue Sky	2	F2	3	5	2	0	5	6	21
18	Blue Sky	3	F3	5	5	0	0	1	2	13
Yes/No疑問文 応答総数	1年			39	73	11	1	18	12	154
	2年			36	16	10	2	34	32	130
	3年			27	15	5	2	11	19	79
	合計			102	104	26	5	63	63	363

られるか。またどのような変化が見られるのか。  
 Q2：現行の教科書に特徴的な傾向はあるのか。またどのような具体的な特徴が見られるのか。

### Ⅲ 研究方法

調査した教科書は、令和3年度から使用している現行の中学校英語の検定教科書（6社18冊）である。それぞれの教科書の本文から、Yes/No 疑問文に対する応答を抜き出し、Richardsの6つの分類にあてはめ、集計を行い、分析する。なお、村端・猪股(1995)同様、練習問題やまとめの例は全て除外し、会話を扱っているコラム的教材ページは、集計に加えることにした。

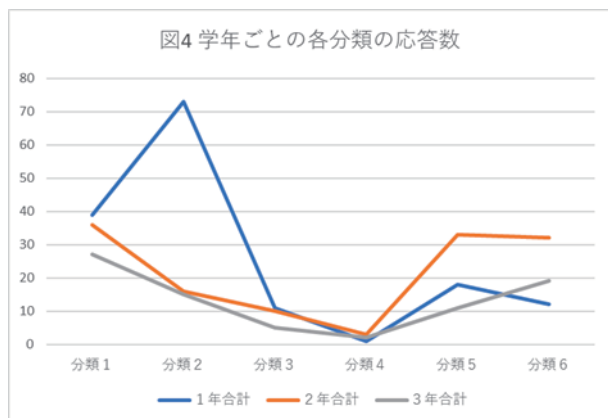
### Ⅳ 結果

#### 1 教科書・学年ごとの Yes/No 疑問文応答数

調査をおこなった6社18冊におけるYes/No 疑問文への応答数の総数は363であり、それぞれの数字は表2の様になった。

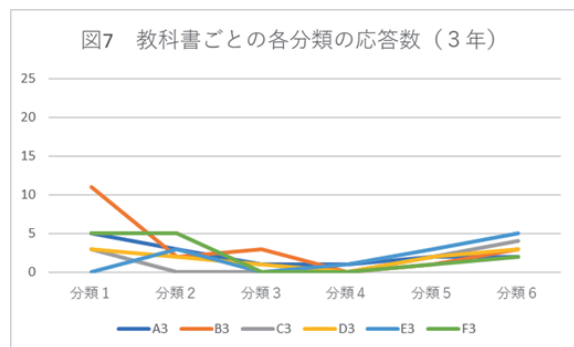
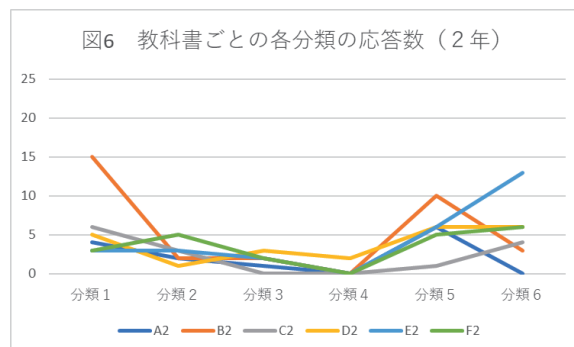
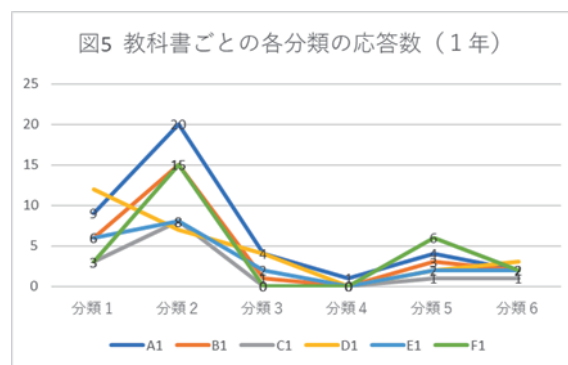
#### 2 学年ごとの応答数

表2から学年ごとの応答数を抜き出しグラフ化してみると、図4の様になる。注目をしているRichardsの分類2の数は、1年73、2年16、3年15となり、入門期においては数多く使われているものの、2年3年になると激減していることが分かる。



#### 3 教科書ごとの応答数

教科書ごとに各学年の応答数をグラフ化してみると、それぞれ図5、図6、図7の様になる。グラフ中のA1, B1などの記号は、表2に示した各教科書に相当している。これらのグラフからは、同じような傾向はあるものの、教科書会社によって本文の編集方針の違いを見ることができる。

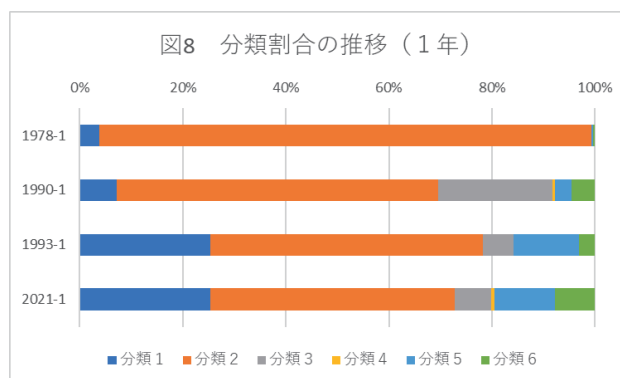


### Ⅴ 考察

#### 1 リサーチクエスチョン1に関して…1995年以前に発行された教科書と現行の教科書の比較

##### (1) 学年ごとの分類割合の推移

教科書を年代順に学年ごとに比較をしてみると、図8～10の様になる。縦軸の記号は教科書の発行年度と学年を示している。ここから分かることは、Yes/No 疑問文を文法事項として新しく学習することが多い学年では、Yes, I do.やYes, I can.などと学ぶ分類2の割合が多いものの、その割合は現行の教科書に近づくほど減ってきていると言える。



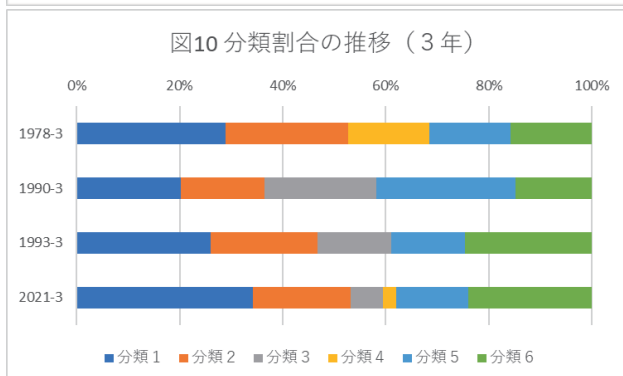
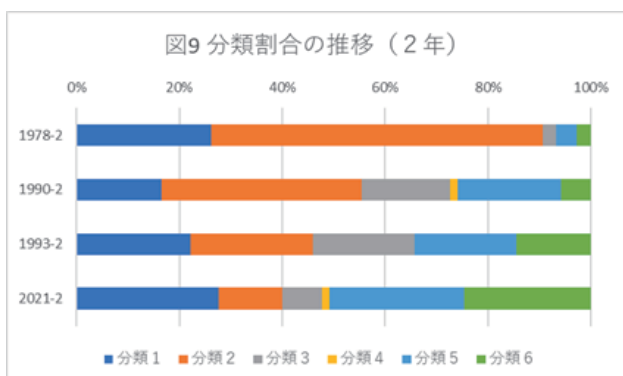


表3 教科書1冊の平均出現回数

	1978	1990	1993	2021
1年	96.3	32.3	27.0	25.7
2年	49.7	23.2	24.6	21.7
3年	12.7	12.3	11.0	13.2

比較している教科書は冊数も違い、学年によって出現総数も違っている。教科書1冊の平均出現回数を調べてみると、表3の様になった。学年ごとのYes/No疑問文の出現回数を比較すると、圧倒的に1年生が多いことが分かる。同じ1年生の教科書でも年代ごとに比較すると現行の教科書に近づくほど出現回数は減っていることも分かる。2年生の教科書では、1978年版から1990年度版では、半減しているものの、その

後はほぼ横ばいになっている。3年生の教科書では、もともと出現回数が少ないからか、ずっと横ばい状態であり、変化はあまり見られない。

## (2) 現行教科書全体の経年比較

今回調査した現行の教科書全体の分類割合を、過去の研究ならびにRichardsの話し言葉の分類割合と経年で比較をしたのが図11である。教科書の経年比較をすると、分類2は確実に減少を続けており、分類1や分類6は増加をしている。全体に多様な応答の形を教科書の本文内に見ることができるようになっていると言えよう。入門期の教科書であるので、新たに学習する表現は基本的な応答から示されるのが当然であるので、話し言葉の割合には至らないが、よりコミュニケーション志向が進み、実際に使われている表現を多く教科書に載せたいという意図が表れているのであろう。

## 2 リサーチクエスチョン2に関して…現行の教科書に特徴的な傾向はあるか

### (1) 分類1が増え、分類3が減っている

図8,9,10で分類割合の推移を見てみると、分類1が増えてきており、分類3が減っている変化が見とれる。この現象は、村端・猪股(1995)においても言及されていたが、村端・猪股は、次の様な例をあげて形式的に区別する意味があるであろうかと指摘している。

例1 Clerk: May I help you?

Amy: Yes. I'm looking for a dress.

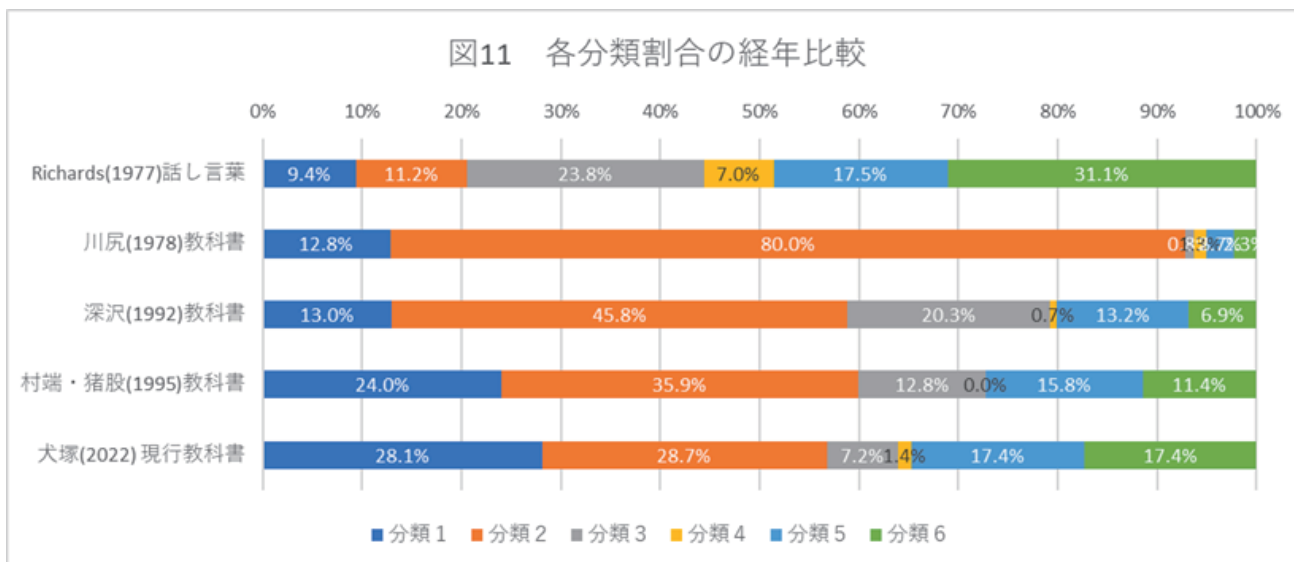
(New Horizon 2:7-3)

例2 Mrs. Light: Are you tired, Kumi?

Kumi: No, I'm not tired at all.

(New Horizon 2:1-3)

唯一異なるのはYes/Noの後の句読点(“.”, “?”, “”)だけ



であると指摘し、分類1の105例中、「Yes/No.+付加的情報」が73例(70%)あったとして、「分類1と3を形式的に区別しても、さほど意味がないと結論づけることができるであろう。」と述べている。

分類1が増え、分類3が減っている現象は、2年・3年においてさらに顕著に見られるようになってきている。村端・猪股が言うように、分類1と分類3を形式的に区別することは意味のないことなのであろうか、ここではさらに内容を分析し、分類1と分類3の役割を考察したい。

現行の教科書においても分類1の91例中「Yes/No.+付加的情報」が66例(73%)みられた。以下に分類1に付加的情報がついた例と分類3の例を示す。

#### 分類1 + 付加的情報

- (1) Asami: How do you come to school? By bike?  
Ms.Cook: No. I walk to school.  
(New Horizon 1: p24) 以下 NH と表記
- (2) Asami: Wow, noon. Are you hungry?  
David: No. We have morning tea.  
So I'm not hungry. (NH1:p40)
- (3) Asami: Do you often come here?  
Josh: Yes. I jog with my dog around the pond.  
(NH1:p48)
- (4) Meg: Whose ticket is this? Is it yours, Josh?  
Josh: No. I have mine. Maybe it's Kaito's.  
Hey, Kaito. Is this yours?  
Kaito: Oops! Yes, it's mine. (NH1:p72)
- (5) Kaito: Were you looking for me?  
Meg: Yes. I wanted to show this to you.  
I made a photo album for this year. (NH1:p114)

#### 分類3

- (1) Ms.Cook: Oh, is this for "picnic area"?  
Kaito: No, it's for "shrine." (NH1:p23)
- (2) Emma: You can see sheep, kiwis,....  
Kaito: Kiwis? Kiwis are fruit, right?  
Emma: Yes, but kiwis are birds, too.  
They're brown and round like kiwi fruits.  
They're our national symbol.  
Kaito: I see. (NH1:p42)
- (3) Ms.Cook: Was it beautiful there?  
Josh: Yes, but there was some trash near the lake,  
so we picked it up. (NH1:p112)

これらの例は1年生の教科書から取ったものだが、同じYes/Noという情報に付加的情報がついているのは変わらないが、分類1では疑問文と違う動詞が使われていたり、2文以上の文が付加的情報としてついたりする。それに対して分類3は、疑問文中の1部分を比較していたり、butを伴って文を比較していたり

する。このことから明らかに分類1では、返事としてYes/Noの情報を伝え、さらに付加的情報として新情報を伝えている。そして分類3は、一部分の違いをすばやく指摘しているという違いがあるのではないかと考えられる。

現行の教科書では、分類1が使われる割合が増えて、分類3が減っているわけだが、それぞれの役割を果たしながらも、ただ単にYes/Noと答えるだけではなく、付加的情報を強く意識したコミュニケーションの特性を学習者に提示する傾向にあると言えよう。

#### (2) 分類5が2年生で増えている

疑問ではない疑問文、つまり依頼の疑問文への応答が分類5にあたると言ってよいであろう。東京書籍のNew Horizonを見てみると、1年生で分類5が4例あるが、初出は「Let's Talk 1 お願い—許可を求める・依頼する」という小単元で次の2例が現れる。

- Meg: Oh, it's hot in this room.  
Can I turn on the fan?  
Dad: Sure. No problem.  
Meg: Dad, can you help me with my homework?  
Dad: All right. Just a moment. (NH 1:p64)
- Kaito: Can you come at three?  
Meg: Sure. I'm looking forward to it. (NH1:p79)  
Meg: Wow! How nice! Can I open it?  
Kaito: Of course. (NH1:p82)

この2例をかわきりに以下の例が通常の単元本文内に現れている。

2年生でも、分類5が使われているのは、「Let's Talk 1 ホテルでのトラブル—苦情を言う・謝る—(Can you check it?)」「Let's Talk 2 ていねいなお願い—許可を求める・依頼する—(May I...? Could you...?)」「Let's Talk 3 電車の乗り換え—道案内—(Could you tell me how to get to...?)」などであり、3年生でも「Let's Talk 2 町中での手助け—申し出る—(Shall I...? Would you like me to...?)」に現れている。教科書会社により編集方針は違うが、依頼・許可・申し出などの機能面を重視した表現の拡大に応じて、Yes/No 疑問文の多様な応答が増えていると考えられる。村端・猪股(1995)では分類5の具体的な使用例を分析しているが、69例中34例がSure.であり、使われている語が偏っており、かつ応答の幅が狭いと述べている。

現行の教科書と出現2回以上の分類5の応答例を比較したものが表4である。Sure.が減り、Of course.やO.K.が増えた程度の変化が見られる。



表4 出現2回以上の分類5応答例比較

1993教科書	2021教科書
Sure. (34)	Sure. (17)
Right. (5)	Of course. (10)
O.K. (3)	O.K. (8)
That's right. (3)	That's right. (4)
Of course. (3)	All right. (3)
Okay. (2)	Certainly. (2)
I'm not sure. (2)	Right. (2)
I don't think so. (2)	Sorry, I can't. (2)
TOTAL: 69	TOTAL:63

多様な応答を意識させる学習は、小学校でも見られる。東京書籍の New Horizon Elementary 6 には次のような歌が用いられている。

### Unit 3 Let's go to Italy

- Where do you want to go?  
I want to go to Egypt.  
What can you do in Egypt?  
You can see the pyramids.  
You can ride a camel.  
Sounds great! Sounds fun!  
Can I go with you?  
Yes!
- Where do you want to go?  
(略)  
Can I go with you?  
Sure!
- Where do you want to go?  
(略)  
Can I go with you?  
Of course!

同じ Can I go with you? という疑問文の応答として、Yes. Sure. Of course. と3通りの応答を示している。教科書の編集方針の中に多様な応答表現を提示したいという思いが表れているのであろう。

#### (3) 分類6が増えている

もう一つ増加傾向にある分類6の具体例を見てみたい。分類6は、Yes/No を伴わず、文脈によって間接的に肯定か否定かを示す応答という定義である。典型例として以下の会話（下線部）で用いられている。

Ben: Hi, Sue. I'm looking for my key.  
Sue: Your key? Ms. Hara may know something.  
Ben: Really? Can you tell me where she is?

Sue: She's over there.  
Ben: Ms. Hara, have you seen a key?  
Ms. Hara: Well, Mr. Ito found one. (Sunshine 3:p20)

自分自身が鍵を見つけたのではなく、伊藤先生が見つけたと言うことで、鍵があったことを示している。

他にも Do you have any ...? などのように Yes の後の内容部分の回答を期待した表現も多く見られる。以下に数例をあげる。

Maria: Do you have any ideas?  
Mark: This spring, I picked up trash along the Aoi River.  
I sometimes see trash in Midori Park. I think we can pick it up.  
Maria: That's a good idea.

(New Crown 2: p33)

Kate: My family will visit Hokkaido this year. (略)  
Do you recommend any places in particular?

Riku: Hakodate. You can enjoy its beautiful view.  
(New Crown 3: p17)

A: Do you know this new mystery novel?

B: I've already read it. The ending is...

A: Stop! I've just started reading it.  
(Sunshine 2: p90)

Meg: You practice soccer very hard.

Kaito: Yes, I want to be a good soccer player.

Meg: Is that all?

Kaito: Well, someday I want to play in the World Cup.

Meg: Wow. Good luck! (New Horizon 1: p33)

どれも、単純に Yes/No を用いることが不自然になる例であり、文脈の中でより自然な応答例を学習者に示していると言える。これらの例が多く教科書の中に見られるようになってきたと考えると、話のやり取りの内容（文脈）が大切に扱われていると言えよう。

## VI まとめと今後の課題

### 1 現行の教科書分析から分かってきたこと

中学校英語の検定教科書が学習指導要領の内容の推移にあわせ、コミュニケーション重視となり、実際の言語使用場面を想定した内容に変化していることにつれて、Yes/No 疑問文への応答の種類割合が、Richards (1977) で示された話し言葉のそれに近づいてきていることが分かった。それと同時に、中学校という英語学習入門期で文法を学習し始める段階であることもあり、自然な話し言葉にこれ以上近づくことには限界も感じる。小学校から音声中心に学習してきた学習者に、文法を明示的に教えることで知識を整理させ、運用力を高めていく必要がある。それだけに教科書本文に、基本形に近い表現を使用する必要があると

ともに、もう一方でよりバリエーション豊かに文脈を考慮した表現も学習者に提示する必要もあるという特徴が表れている。

## 2 今後明らかにしたいこと

令和2年度から小学校高学年で外国語が教科化され検定教科書が使われるようになった。小学校段階では音声による学習を主とするので、音声で提示される歌の中にバリエーション豊かな表現も扱われている。以前は、中学校から英語を学習したので、教科書本文に示された英語表現をどう学習者が学び、習得していくかを研究できたが、今後は、小学校での学びも考慮しなくてはならない。小学校は音声による学習を中心とするので教科書本文に学習すべき表現が表れてこない。その代わりに使われる音声教材である歌やチャンツなどに音声として現れてくる英語表現も考慮する必要がでてきた。学習者が教科書に示されている表現をどう習得していくのか、小学生の学びについても明らかにするのが今後の課題である。

## 注

<sup>1</sup>Written English Corpus は、以下の英語話者である小説家や劇作家のテキストで構成されている。Greene, Graham: *The Power and the Glory*; Hemingway, Ernest: *A Farewell To Arms, A Moveable Feast, and The Old Man and The Sea*; Maugham, Somerset: *The Razor's Edge*; Waterhouse, Keith: *Billy Liar*; Miller, Arthur: *All My Sons*; Williams, Tennessee: *The Glass Menagerie*; and Maugham, Somerset: *Collected Short Stories*.

<sup>2</sup>Spoken English Corpus は、英語の母語話者である学生へのインフォーマルなインタビューの録音データで構成されている。Richards の勤める大学の学生4名が参加している。

<sup>3</sup>調査を行ったのは、東京書籍の New Horizon・開隆堂出版の New Prince・学校図書の Total の3社9冊である。

<sup>4</sup>調査を行ったのは、東京書籍の New Horizon・学校図書の Total・教育出版の One World・開隆堂出版の Sunshine・中教出版の Everyday・三省堂の New Crown の6社18冊である。

<sup>5</sup>調査を行ったのは、東京書籍の New Horizon・学校図書の New Total・教育出版の One World・開隆堂出版の Sunshine・中教出版の Everyday・三省堂の New Crown・光村図書 Columbus の7社21冊である。

<sup>6</sup>調査を行ったのは、東京書籍の New Horizon・教育出版の One World・開隆堂出版の Sunshine・啓林館の Blue Sky・三省堂の New Crown・光村図書 Here We Go の6社18冊である。

## 引用・参考文献

- アレン玉井光江・阿野幸一ほか(2021). 『New Horizon Elementary English Course 5』東京書籍
- アレン玉井光江・阿野幸一ほか(2021). 『New Horizon Elementary English Course 6』東京書籍
- アレン玉井光江・阿野幸一ほか(2021). 『New Horizon Elementary English Course Picture Dictionary』東京書籍
- 深沢清治 (1992). 「中学校英語教科書における Yes/No Question に対する応答文の分析」『山口大学教育学部論叢』42(3), 81-90
- 川尻武信 (1978). 「指導技術としての英問英答」『中国地区英語教育学会研究紀要』No.8, 11-15
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター (2020). 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料小学校外国語・外国語活動』東洋館出版社
- 文部科学省 (2018). 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説外国語活動・外国語編』開隆堂
- 村端五郎・猪股俊哉 (1995). 「英語の Yes-No 疑問文に対する応答の型について：中学校検定教科書にみられる応答を中心に」『年報いわみざわ：初等教育・教師教育研究』16, 43-54
- 大西泰斗・McVay, Paul Chris (2011). 『一億人の英文法』東進ブックス
- Richards, J.C. (1977). "Answers to Yes/No Questions" *English Language Teaching Journal*, 31(2), 136-41